

四八 一茶の像

寫眞の(一)は「一茶一代全集」巻頭に掲載のものである。此描者は一茶門人村松春甫で、春甫は名を翹といひ、胡庵・董庵・鷗巢・處信などの號があり、信州長沼の人、狩野派の繪をよくし、安政五年、八十七歳を以て歿した。繪をよくしたといふ春甫、一茶より十歳の弟であつた春甫、一茶歿後三十餘年長命した春甫、其人の手に成つた畫像が、眞の肖像なることは疑ふ餘地もなし。

寫眞(二)は一茶木像。(一)と對比して如何に酷似せるか、全體的の風貌、圓なる眼、厚き唇、鼻から口の邊を圍む皺、一見既に説明を要しない。

一茶の風貌

身ノ長ケハ餘リ高カラズシテ、較々横ブトリニフトリ、顔ハ所謂廣額豐頬河目河口ニシテ則チ額廣ク皺深ク刻マレ、頬骨高ク張り眼尻長ク切レテ、鼻ハ小鼻大キク、口亦大ニ唇厚

春甫家信馬



（載所集全代一茶一）像畫茶一①



像木の茶一 ②

ク、耳朶ユタカニ聳エ垂レテ、頭へ比較的大ナリ、手足モ割合ニ大キク、殊ニ手ノ指太ク
節々稜立シテ見エタリトゾ（書畫骨董雜誌三三三號）

とあるにも合致し、木像用材は黄楊の一木、高四寸三分、横三寸三分、奥三寸八分、頭巾は毛
繻子製にて、之を脱れば全くの圓頂である。作者の刻印も何もないが、時代は相當にあつて
（一）を標本にして（二）を作つたといふよりも、同時代に同基準に因り、造られたものと観
察したい。

一茶の像は自描と否とに拘らず、多くは俳畫式の粗茶なもので、眞像と認むべきもの少く、
この（一）（二）の如く整つたものは、寡聞未だ他に之を知らない。